

学園ニュース

富山大学

NO. 66

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

平成元年12月11日



人文学部語学文学科校舎玄関壁画

教育学部・丹羽洋介 作

目

次

人文学部壁画「思索の森」について	教育学部助教授 丹羽洋介	2
古き革の袋に新たな酒を盛る	附属図書館長 小嶋 學	3
健康人とは	保健管理センター所長 稲垣保彦	4
新任教官紹介及び挨拶		4
イギリス雑感	経済学部教授 小松和生	8
二酸化鉛薄膜の特性	工学部教授 西部慶一	9
留學生活の半ばを終えて	外国人留学生(教育学部) 渡辺ジャネッテ	11
留學雑感	外国人留学生(教育学部) 清水マルシア小百合	12
学部だより(教育学部)		13
学生部だより		15

人文学部壁画「思索の森」について

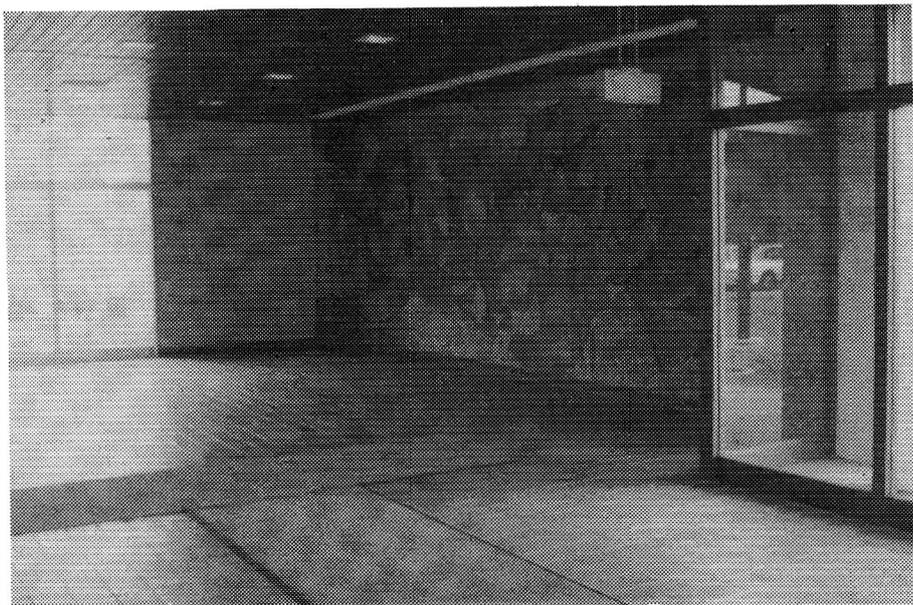
教育学部助教授 丹羽 洋介

この壁画はフレスコとモザイクを組み合わせたものである。フレスコとは、上塗りの漆喰（石炭と砂を水で練って壁に塗ったもの）が乾かないうちに、水で溶いた顔料で描写する技法であり、モザイクは、同じく塗ったばかりの柔らかい漆喰に石やガラスの細辺（テッセラ）を埋め込み、その色彩や配列によって表現する技法である。フレスコもモザイクも共に漆喰が水分を持っている一定時間のうちに行わねばならないため、ある程度の分量に区切って少しずつ制作をすすめていかざるえない。

このように両者は共通する性格を持っているのであるが、何故かこの二つを組み合わせた作品はこれまでの長い美術の歴史においても見られない。今回、約20名の美術科学生と一緒にこの混合技法に取り組んだが、なにしろ初めての試みなので色々苦勞する事も多かった。しかしその甲斐あって幾つかの新しい発見や技法上の収穫があった。大学内における壁画制作は、私自身にとって有効な研究方法であるが、それだけでなく

手伝ってくれる学生にとっても得がたい体験になるであろう。また、所産としての壁画は大学の文化的環境づくりに貢献することになると思われ、正に一石三鳥だと考えている。

なお、主題の「思索の森」についてであるが、思索という事については人文学部のご希望に添ったものであり、後半の森というテーマはここ数年、シリーズとして私が取り組んできた題材である（例えば、教育学部玄関のガラスモザイク「生命の木」では、単に生きることとしての生命だけでなく、精神的な意味での生命をも守り育てる象徴として、木を表現してみた。考えてみれば、洋の東西を問わず、森というものは思索に適した場所であって、そこで優れた思想や詩、創造的精神が形成された例も多いと聞く。この「思索の森」の壁画が、大学という学問の府の装飾として、あるいは思索を練り深めることの象徴として、皆さんに親しんでいただけるならば誠に幸いである。



正面玄関から見る壁画

古き革の袋に新たなる酒を盛る

—サルツブルク雑感—

附属図書館館長 小嶋 學



この夏、幸運にも私は、1ヵ月間、オーストリアはサルツブルク（現地の人達はザと濁らず、このように発音している）に滞在する機会を得た。サルツブルクと言え、ある人は、毎年7月下旬から開かれるあの有名な音楽祭を、ある人は、かの偉大な音楽家であるモーツァルトを、そして又、ある人は、あの素晴らしい映画「サウンド オブ ミュージック」の舞台を思いだされることであろう。ここは、オーストリアで最も早くローマ文化とキリスト教の洗礼を受けて発展し、1200年にわたり統治した大司教の富と権力が築きあげた芸術の香り漂う古都で、北欧のローマとも呼ばれている。サルツブルクとは「塩の城」という意味であり、その名はそのまま、先史時代からこの町の南で採取されて来た岩塩の取り引きにより大司教が巨万の財を得て来た歴史を、如実に物語っていると言えよう。かつて、岩塩を運搬する船の行き来で、にぎわっていたであろうサルツァッハ川の左岸にひろがる旧市街地は、今も色濃く中世のたたずまいを残していて、目抜き通りであるゲトライデガッセには、中世のギルドの伝統をうけついで美しい鍛鉄細工の看板をかけたいろいろな店が軒を連ね、常に観光客の足の途絶えることはない。その通りの中程に、モーツァルトの生家があるが、生家の裏手は広場になっており、その広場をへだてて、中庭をもったがっしりした石組みのサルツブルク大学の建物が、大学附属の教会堂とともに我々の目に入って来る。この建物の一角には、大学創設の年である1623という数字と、創設当時の学部の名がラテン語で刻みこまれていて、350有余年の星霜をへた今日でも、はっきりと読みとることが可能である。

私は、一日、この古い由緒ある建物の中にある大学図書館（本館）を訪ね、館内を見学するとともに、いろいろと話を聞くことが出来た。この本館は、地上3階の建物ではあるが、地下に3階からなる広い書庫を

もっている。その地下の書庫の一隅、防水コンクリートの壁に囲まれてエアーコンディショニングされ、厳重な管理の下におかれた特別室には、14世紀代の羊皮紙に書かれた貴重な書物などが、あるものは色あせ、幾分すり切れた背革を見せて、ずらりと並んでおり、建物の外観もさることながら、その収蔵図書にも、歴史の古さをしみじみと感じさせるものがあった。しかし、一方において、館内の設備がすこぶる近代化されているのを知り一驚した。学内の利用者は、それぞれ、バーコードナンバーのカードを所持しており、又、蔵書の大部分は、すでに、バーコードナンバーで整理が完了していた。そして、例えば、貸し出しの時などは、貸し出す本と、利用者のバーコードナンバーを機械に読みとらせて記録すると同時に、それらのナンバーと返却期限の日付けをプリントした貸し出し票が、自動的に作成され、それを利用者へ手渡す仕組みになっていた。又、地下の各階の書庫と受付との間での本の運搬は、機械化されており、電算機で制御されたローラーシステム上を移動するプラスチック製の籠によって行なわれている。それらの籠の各階へのふりわけは、おのおのの籠につけられた行先を電氣的に読みとることによって行なわれ、籠が自動的に上ったり下がったり、行ったり来たりしている様は、実に印象的であった。

現在、サルツブルク大学図書館は、この本館を中心として3つの学部図書館（分館）からなっていて、本年秋に新しい電算機を導入し、学内の図書館情報システムを完成する予定とのことであった。一方、オーストリア国内の国立大学図書館の間には、来年中にそのネットワークの構築を完了するという構想が進んでおり、まさに、古き革の袋に新たなる酒を盛るという表現がぴったりの感を受けた。そして、同時に、中世の面影を残し芸術の香り豊かな、しかも、一步、郊外へ出れば、数多の湖水が点在する美しい大自然にとり囲まれた、このサルツブルクの町にも、目には見えない新しい情報化の波が、ひたひたとおし寄せている現実を肌を感じつつ、帰国したことであった。

健康人とは

保健管理センター所長 稲垣保彦

余暇の時代、これからの健康人とは、これは、拙著「余暇と活力」の帯タイトルです。さて、「うどの大木」「からだは小さいが、やることはでかいぞ」、「生きることは呼吸することではない、活動することである」、「健康は人生にとって唯一ではない、しかし健康でなければ何もできない」。人間、考え方と実践が大切であることを、ものがたっていることばだとおもう。主体性である。与えられた（遺伝、環境）健康と、克ちとった（努力、習慣）健康を理解し、さらに、「外なるものと、内なるものとの調和」をはかることが健康人の鍵であろう。からだところといってもさしつかえない。心の健康の基盤ともいべき自己理解の重要性を再認識しなければならぬだろう。学生が人間の弱さ、愚かさを認識して、自己探究、自己実現の契機となるような、心の健康教育が大学の基盤教育となれば、大学教育は、学生にとって真に生きた

教育となってゆくと思われる。1.活性2.活力3.活動4.運動5.気力と、1.から5.までいづれも健康人を象徴することばであるが、活性-活発な性質、活力-活動の源泉となるいきいきした力、活動-いきいき動く、元氣よく働く、運動-肉体を動かす、気力-何かをしようとする元氣、精神力。ことばのニューアンスに微妙な差があって考えさせられるが、素朴さからいえば、5.から1.へとつながるのではなかろうか。やる気があって、肉体を動かし始め、集中すればいきいきと動き、その体験が、あらゆる生活の源泉となって自信をもつようになるだろう。人生を生き抜く活性は、素朴から始め新鮮へのプロセスをつかんでほしい。気力、運動、活動、活力、そして活性をもって、自己変革を基盤にしての外界変革への努力を期待しております。健康人は、目標、計画、実践、反省のサイクルを繰返し、より充実した人生を追求する人間である。

🌸🌸🌸🌸🌸 新任教教官紹介 🌸🌸🌸🌸🌸

大工原 ちなみ 助教授（人文学部）元 10. 1
昭60. 3 筑波大学大学院博士課程文芸・言語
研究科単位取得退学
担当：アメリカ文学

北 林 吉 弘 教授（教育学部）元 10. 1
昭28. 3 立正大学文学部卒業
担当：地理学

岡 安 隆 講師（教育学部）元 10. 1
昭60. 3 東京工業大学大学院理工学研究科修
士課程修了
理学博士
担当：代数学及び幾何学

和 合 肇 教授（経済学部）元 10. 1
昭43. 3 早稲田大学大学院経済学研究科修士
課程修了
担当：政策科学

廣 瀬 貞 樹 助教授（工学部）元 8. 1
昭55. 3 東北大学大学院工学研究科
情報工学専攻博士課程修了
工学博士
担当：基礎情報工学

立 川 健 治 助教授（教養部）元 10. 1
昭58. 4 京都大学大学院文学研究科博士課程
単位取得退学
担当：歴史学

新任の御挨拶

人文学部助教授 大工原 ちなみ



10月1日付けで、人文学部語学文学科（アメリカ文学）に勤務することになりました。どうぞよろしく願ひいたします。専門はアメリカ文学の中でも比較的新しいところ、つまりは第2次世界大戦後の作家たち、それも主として、ソール・ベローやバーナード

・マラマッドといったユダヤ系作家を研究しております。専門は文学なのですが、興味が昇じてユダヤ教や思想にも手を出しかけております。きっとお詳しい方がいらっしゃると思います。どうぞお教えてください。

学生時代までを関東で過ごし、その後、四年半程、名古屋の南山短大で、教えておりました。この富山には、大学時代の一番の悪友がおりますので、たびたび

訪ねており、アルペンルートも夏と秋の二度経験しております。名古屋に居りましたこともあって夏の暑さには自信があり、その意味では心強いのですが、何分にも肝心の冬には来たことがなく、これから冬に向かい一抹の不安はございます。でも、こうなったら覚悟を決めて、雪を逆手にとってスキーでも始めようかななどと虫のいいことを考えております。こちらの方もご指導の方、どうぞよろしく願ひいたします。

もっとも着任早々、人文学部の皆様とテニスをし、その後スキーでは、余りにも遊びすぎというものでしょうか。今冬は厳しい気候を利用して、やはり腰を落ち着けて研究に励む事にいたしましょう。

まだまだ至らぬ者ではございますが、皆様に助けていただきながら、一生懸命、研究に励み、又、皆様のお役に立てますよう努力致す所存でおります。何卒宜しくお願い申し上げます。

新任のごあいさつ

教育学部教授 北林 吉弘



本年（平成元年）10月1日付けで、教育学部地理学担当としてみなさまの仲間入りをさせていただきました。私は人文地理学・地誌学が専攻で、これまで首都圏の私立大学で地理学を担当したり、県立技術短期大学で「地域と経済」に関する講義をしてまいりました。

教育学部の前身であるかつての富山師範学校は母校であり、今は名誉教授となられた懐かしい恩師も何人かご健在でいらっしゃいます。地理学研究室を創設なさいました故石井逸太郎教授は生涯を富山県の地理学発展に捧げられました。先生の薫陶を受けた門弟が今でも県下に数多くいて活躍しています。

富山県は自然・文化共、豊かに恵まれた地域であり、毎年全国各地の大学から地理学の野外研究のため多くの教官や学生が訪れてきます。その方々との交流を深

めることはよい刺激にもなり、本学の学生達にも奨励したいと思っています。

北アルプスの山なみの雄大さは見事です。立山連峰には氷河時代の名残りといわれる「山崎圏谷」（東大の地理学教室の創設者山崎直方教授にちなんで命名された）も存在し、晴れた日には富山平野からも遠望できます。砺波平野の散居村は七千戸余りの農家が平野いっぱい豆粒のように散在しています。その成因については人文地理学界でも長い間論争されてきました。このような地理学的に興味ある素材が豊富な本県に奉職して学べることは大変幸福なことです。本学の学生諸君もこのように恵まれた地理的風土に生きられる喜びを十分に認識してほしいものです。

近年、県下各地で地理学を核とした研究所が発展してきたことは注目されます。自分達の生活を取りまく風土について学ぶ姿勢は教育の基本でもあります。義務教育諸学校の教師をめざす教育学部の多くの方々には、自分のよって立つ郷土について、認識を深めては

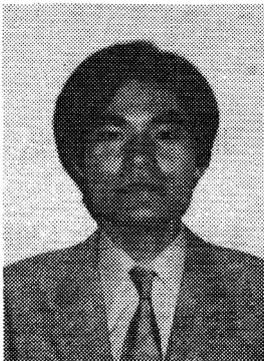
しいものです。

今夏、お茶の水女子大学文教育学部地理学教室の学生たちが約1週間にわたって富山県下を巡検しました。「なぜ富山をフィールドに選んだのか」と質問してみても解ったのは「富山県は地理学の実験道場だ」ということです。東の「黒部川扇状地地域社会研究所」から西の「砺波散村地域研究所」や「五箇山山村センター」まで、資料の整った研究機関がいくつも存在し、野外調査の世話から資料のコピーまで、至れり尽せりのサービスが提供されていることに、東京からやって来た学生達は驚いたのです。学生以上に指導教官が大助かりだったとおっしゃっていました。私たち地元の

大学でも、これから大いにこのような施設を活用させていただき教育や研究の成果を上げたいものと希望している次第です。私が地理学の道を選んだ理由の一つは、恩師田中啓爾先生の野外調査法に魅力を感じたことにあります。先生の地理学は常に野外調査を基本としたものでした。実地に見て考えることを徹底的に仕込まれました。先生は健脚で、とても足速やでした。これからはできるだけ機会をみて学生諸君とともに野外へ出て歩きたいと思っています。皆様方のご指導御鞭撻をいただきますと共に、くれぐれもよろしく御好誼の程をお願い申し上げます。

新任のご挨拶

教育学部講師 岡 安 隆



教育学部数学科教室の講師として、10月1日付けで赴任いたしました。

私の専門は幾何学です。幾何と聞くと、中学校時代に習ったユークリッド幾何学を思い出して顔をしかめる方もいらっしゃるかも知れません。

しかし、私の専攻しているのは「微分幾何学」という分野で、曲面を高次元にした“多様体”というものを扱っています。多様体の曲がりぐあい（曲率）と多様体のいろいろな性質との関係を主に研究しています。

私の生まれは埼玉県です。大学と大学院時代に一時期東京に住んでいて関東地方での生活が長かっただけに、3年前に青森県の弘前大学理学部に就職することになったときは、冬の雪の生活に耐えていけるだろうかと心配しました。幸い青森の住宅は暖房設備がしっかりしていましたので、冬の生活はむしろ弘前の方が

快適でした（正月など実家に帰るときまって風邪をひいたものです）。冬の間の運動不足を除けば、弘前は自然に恵まれた住みやすい所でした。大学の校舎から眺めた岩木山の四季折々の姿は、忘れ難いもののひとつです。富山県もまた自然に富んだ土地であり、いろいろと旅行するチャンスができて喜んでおります。弘前で覚えそこなったスキーも、今度はマスターできるかもしれません。

大学院生の頃は、毎日ありあまるほどの時間があって、いろいろと好きなことをやっていたのですが、就職してみると、生来の怠け癖が出てしまい、研究のペースがずいぶん落ちたのではないかと思います。教育と研究の両立は難しく思えました。

こちらに来てなおひと月ですし、講義がはじまって二週間も経っていないので、自分本来のペースがまだ取り戻せていないようです。これから少しずつ元に戻して、じっくりと研究と教育に取り組んでいきたいと思えます。宜しく願いいたします。

新任のご挨拶

工学部助教授 広瀬 貞樹



本年8月1日付で、工学部電子情報工学科に着任致しました。

御承知のように、電子情報工学科は従来の電気工学科、電子工学科に情報工学の講座を加えて改組し、この四月に開設したばかりの新しい学科です。

私が大学に入学したころ、世の中では“電子”という言葉がもてはやされていて、電気製品の頭にやたらと“電子”が付いていたのを覚えています。電子ジャー、電子ポット等です。

そんな時代に電子工学を専攻しました。電子工学実験で、ミニコンを使ったコンピュータ実習があり、それがコンピュータとの出会いでした。

電子工学がよくわからなかったこともあり、結局大学院では情報工学を専攻しました。

今世の中では、“情報”という言葉がもてはやされています。その立役者であるコンピュータですが、世界初のコンピュータENIAC（エニアック）が開発されてまだ40数年しか経っていないことを考えると、

その進化の速さ、利用分野の広がりかたには驚かすにおれません。コンピュータなどおおよそ関係はないと思われていたところでコンピュータが重要な役割を演じ、コンピュータを専門としない方でも、一頃の英会話のように、コンピュータを使えること、コンピュータのことを知っていることが今や常識の時代になってきています。そして、この進化は今後益々速さを増し、幅を広めていくものと予想されます。

新しい学科で、そのコンピュータの進化に負けないように、教育に研究に頑張りたいと思っていますのでどうぞ、よろしくお願い致します。

ところで、私はもともと富山の出身ですが、十数年前に富山を離れてからずっと太平洋側に住んでいました。ですから今年は是非雪を見たいと思っています。あの38豪雪では、家の二階から出入りしたことや、道路の雪をのこぎりで切ってソリに乗せ川まで運んで捨てたこと、かまくらを作って遊んだこと等を覚えています。もうそんなことはできないでしょうけど、子供に真っ白の雪を見せてやりたいと思っています。

今年の冬は大雪であってほしいと、密かに期待しています。

新任のご挨拶

教養部助教授 立川 健治



今回の富山で25回目の引越しである。佐賀・長崎・大阪・東京・神奈川までが親の都合で、あとの京都・大阪・神奈川が僕の好みで渡り歩いたということになる（このなかでは、バイタイリティーに溢れた大阪とイカガワシサを漂わせた川崎の二つが、気に入っている）。

そうなるんじゃぶる言葉がどうなるか、と思われるかもしれないが、これが、やはり、言葉は10代始めて決定されるようで、つごう約15年にわたって一番長くいた関西よりも、中学・高校時代を過

ごした、川崎・横浜の「そうじゃん」言葉が身につけている。

そのようななかで、関西の影響を残しているのが、近鉄ファンであるという、全国的に見るとマイナーな（近鉄を社会人野球のチームと思っていた人をぼくは知っている）事実である。思い起こせば、それは、30年前の1959年、生まれて初めて見たプロ野球の試合が、日生球場の近鉄対大毎だったときから始まっている。苦節20年、やっと優勝したと思ったら、2年連続広島に負け（この頃は年間50試合通うというような夢のような暇な時間に生きていました）、今回も巨人ごときに負け、もう勉強にも身が入らない（そうです、僕はこの原稿を1989年10月29日に書いているの

です、それにしてもグヤジー)。もう来年からは、娘のようにロッテファンになろう(実は、富山の前には、川崎、それも川崎球場のすぐ裏に住んでいて、よく通っていたから、娘がロッテそれも西村、ちなみに背番号3、のファンになってしまったのです)。

さて、最後に、現在の研究テーマは、「日本におけるアメリカ」である。これは、日本からアメリカに向かったヒト・モノの流れや日本におけるアメリカのイメージの形成課程を追うことで、さしあたっては、「明治の日本」を考えようというものである。そして、

「明治期における賭博空間の変容(賭博が明治国家によっていかにねじ曲げられ、しかもそれが現在の賭博空間までを支配している、といったようなこと)」に関する史料も、昨年からぼつぼつと集めている(これは趣味からこうじたもの)。それから、富山にきたからには、前々から興味をもっていた翁久允のことも調べなければと思っている(これは「日本におけるアメリカ」と関連したもの)。

以上。今後ともよろしく、お願いします。

◆ 海外研修記

イギリス雑感

経済学部教授 小松和生

1988年8月21日～10月20日まで2カ月間の在外研究のために、イギリスに1カ月間滞在したあと、欧米をまわってきました。かつて私も一員として参加した宮本又次編『アメリカの日本研究』(東洋経済、1970年刊)以降、ロストウやライシャワーらによって唱えられた日本「近代化」論が、その後欧米に於いてどの様に変化したか、その動向を調べてみようというのが、主なねらいでした。

「研究」そのものの成果は別にゆづるとして、ここでは、イギリスで見聞したことや感じたことなどを思いつくままに述べてみたいと思います。といっても、高々1カ月間の滞在ですから、きわめて表面的で、ほんのさわりに過ぎないことになるでしょうが。

まず、ロンドンへ着いて、真っ先に目に映ったのは、豪華な装飾がほどこされた一般の住宅や建物、歴史の重みや風格をただよわせた宮殿や寺院それに美術館や博物館でしたし、また市中のあちこちにある芝生で緑一面の大きな公園、華やかなレッドカラーのダブルデッカーといわれる二階建てバス、タワーブリッジを水面に映すテムズ河やピックベンなどでした。とくに絵画の大好きな小生にとっては、沢山ある美術館の中でも、ナショナルギャラリーは、たまらない魅力でした。モネ、ドガ、ゴッホ、セザンヌ、ピカソ、マチス、ルノアールなどのため息のするような名画ばかり、しかもこれが無料ときている。何日間も通い詰めたいと思ったものです。

ロンドンから少し離れてみても、目に飛び込んでく

るのは緑のジュウタンを敷きつめたような牧場と羊の群れ、そして小川や小高い丘の間に見え隠れするいかにもロマンチックな教会や古城。その周辺を取り囲むメルヘンチックな町や村で、なんだか軽井沢と志賀高原、それに北海道のよいところをミックスしてような風景がごく普通の生活空間として、どこまでもひろがりをしていたのです。思わずすばらしいところだなあ、と感嘆せざるを得ませんでした。これも一種のカルチャーショックだったと言えるでしょう。

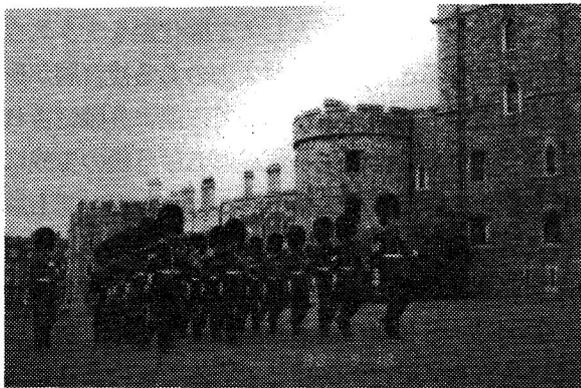
それに多くの老人(夫婦)や障害者が観光地へでてきて、ゆっくり楽しんでいる風景をよく見かけました。ホテルや交通安全その他を扱うインホメーションセンターもよく発達しており、国鉄の各駅も visitor の荷物運搬のために、あるいは老人や障害者のためにスロープ化が完備されていて、日本のJRなどとは格段の差があるように思いました。ロンドン市内を往き交う人も白人、黒人、チャイニーズや日本人を含むいろいろなアジア人など、世界各地の人々が入り交じっていて、まさに人種のルツボの状態を呈しており、日本人だからといってジロジロ見られるようなことはありませんでした。また、イギリス人は long queue といって整然とした列をつくるのを、日本人のように中途半端でなく、ごく日常的な行為としており、また道を尋ねても大変親切で、これらは永い間かかって築きあげた生活習慣の好例のようにも思えたものでした。

しかし、以上のようなすばらしいイギリスあるいはロンドンに対して、一方では「英国病」とよばれる実

に暗い沈滞した憂鬱な陰の部分があることも事実でした。それは、まず老若男女を問わず浮浪者、乞食が非常に多いことに表れています。一般の市民か、職を求めての旅行者で行き暮れた人か、それともその境界線上にある人か、区別がつきにくい人もかなり多く、とくにロンドン市内の各主要駅ターミナルの中や、すぐ外にある公園などには、まさにウヨウヨといった状態でした。とくに印象的だったのは、一見紳士風に見えるイギリスジェントルマン氏がごみ箱の中を、古い新聞だけでなく、たばこの吸殻を求めて漁る、あのもの悲しい光景でした。まさに、忍び寄る貧困、現代のイギリス資本主義の裏面を見る思いでした。それに、ターミナルがきわめて汚く、British Railwayの中も、シートなど破れたらそのままに放置されているものがほとんどだといっているようでしょう。この点、別にはめる訳でもないが、日本のJRなどとは対照的です。由緒あるホールも、有名ホテルも、何か荒れいて、無味乾燥に感じられたものでした。地下鉄も古い車両で、小さくて暗く、その上、変な臭いもしてきたならしい。町中もゴミ処理が非常に悪いように思われました。町にはいたるところにTo letの文字がかかげられており、大小様々なビルが貸しに出されていて、不

況の一端を示していました。

このように現代のイギリスは、豊かさ貧困とがきわだった好対照をなしてるようです。一方では、18~19世紀に、主に広汎な世界にまたがる植民地支配を通じて蓄積してきた富で築き上げた社会的資本の存在（遺産）は、私のようなvistorに対して、そのカルチャーの高さで一定のショックを与える側面をもっていますが、他の側面では、今やイギリスにはそれを維持・発展させるだけの実力もなく、いわば、荒れるに任せているのが実情のようです。イギリスを訪ねて、カルチャー・ショックを受ける人も多いと聞きますが、それは、一方の華やかな部分のみに眼を奪われているに過ぎないと思われまます。その華やかな部分も、かつて七つの海にまたがって、あの否定されるべき苛酷な搾取収奪という方法によって築き上げた遺産なのであり、また、その遺産も今日維持することが困難な状況にあるのです。しかし、一方、彼らが、過去に築き上げたカルチャーそのものと、それによって派生したよき生活習慣などは、私たちが学ぶべき多くのカルチャー性をもっていることだけは確かでしょう。現代のイギリスはそのような矛盾のルツボの真唯中にあると思われて仕方がありませんでした。



ウインザー城



タワーブリッジ

◆ 特定研究

二酸化鉛薄膜の特性

工学部教授 西部 慶一

特異な機能を有し良伝導体である酸化物としては、特に二酸化鉛が古くから知られている。このような物質を強靱な基体表面に薄膜として固定し、電気分解用の電極として、または固体触媒として利用できれば、

工業的にも大きな意味を持つことになる。

二酸化鉛にはOrthorhombicに属する α 型とTetragonalに属する β 型の二種の結晶変態が存在し、電気抵抗、消耗量および硬さなどの点において、 β 型の方が

勝れた特性を持っていることが分かっている。二酸化鉛を電気分解の陽極として用いると、酸素過電圧はほぼ白金に匹敵するほど高い値を示し、白金やその他の電極においては非常に効率の悪いヨウ素酸塩の過ヨウ素酸塩への酸化や、クロム(Ⅲ)のクロム(Ⅵ)への酸化などに対して約80%以上の効率で反応を進行させることができるなど、非常に特異な触媒機能を示す。また水溶液電解によるオゾン生成においても、約10%の電流効率を示すことが分かっており、他の電極の追従を許さない特性を持っている。

このように二酸化鉛は勝れた機能を有する物質ではあるが、硬いがもろい特徴があり、長時間の使用においては、二酸化鉛自身の消耗はほとんど無視できるほど少ないが、基体との密着性の悪さや二酸化鉛層の歪の蓄積により割れを生じ脱落するに至り、そのため寿命が比較的短くなる欠点を有している。

二酸化鉛と比較的密着性の良い物質として知られているのはガラス、白金、酸化イリジウムなどであり、その他の例えば黒鉛などとの密着性は悪く良好な結果を示さない。基体物質として最も良好な特性を持つ物質としては、チタニウムが考えられるが、この表面に薄膜として二酸化鉛を強く固定するためには、中間層を形成する必要があり、従来より種々研究されて来ており、現在では白金をスパッタリングにより分散させるか、酸化イリジウムを固定させる方法が取られている。

二酸化鉛を薄膜とし基体面に接着させるには、色々な手段が考えられる。例えば最近流行しているスパッター法やCVD法などを用いることも考えられるが、水溶液から電解酸化する方法を用いることが最も簡便であり、しかも電位こう配のあるふん囲気で、大きな過電圧を掛ける条件で行えば、かなり強固な膜を作ることができる。しかし、いずれにせよ、基体と表面の二酸化鉛結晶層は異物質であり、結晶生長の間に必然的に歪を生じ、それが蓄積されれば遂には割れが生じて来ることは、避けられない現象である。

我々の研究室において、基体との密着性の良い条件などを追求するため、取りあえず歪の蓄積状態を解明することとした。歪の in-situ 測定法としては、電極表面の湾曲度を測定する方法、リボン電極の伸びを測定する方法や圧電素子による方法などが開発されて来ている。しかしこれらは、小さい歪の測定に適し

ており、割れを生ずる程度の測定は不可能であり、またこれらの方法は煩雑な方法であった。近年、高分子接着剤の開発は目ざましく、かなりの酸化性ふん囲気においても絶縁性を維持できるものが発明されている。酸化性ふん囲気の水溶液中で、歪ゲージを電極表面に張付けて測定する方法が可能であるのではないかと考えて、この方法の適否について検討した結果、うまく行くことが確認できた。この方法を用いて、チタニウム基体に二酸化鉛を電解法により析出させ、その結晶の厚み方向への生長にとまなう歪を測定した。少数点以下一桁の $\text{kg} \cdot \text{mm}^{-2}$ 単位のstressの時間的変化を正確に測定することができた。また、割れの生ずる際の大きな歪変化も記録することができ、従来用いられて来た方法に比べ簡単に in-situ に歪を測定する方法であることが確認された。さらに、鉛とタリウムの複合酸化物を電着させ、その際の電着歪を測定した。この場合はほとんど歪を示さないで結晶生長することがわかった。鉛とタリウムの複合酸化物は超伝導性を示す結晶形の一つであると言われている。当研究室には装置がないので超伝導性は測定していないが、複合酸化物を水溶液からの電析によっても得ることができ、またその物質の超伝導性と歪が関連があるのかどうか不明であるが興味ある事実が観測された。その他、ガラス繊維の布を中間層として二酸化鉛をチタニウム面に析出させると、非常に耐久力のある複合層が形成されることは、当研究室において以前より確認されていたが、これらの結晶生長過程における歪の生成についても測定した。ガラス繊維層が存在していても、この複合層の歪はガラス繊維層がない場合とほとんど変わらないことが観測された。この複合層の耐久性の大きい原因は、SEMによる断面の観察から、割れに至る伝ばをガラス繊維が妨害していることによるものと考えられた。

このような一連の研究により得られたとは、比較的手近にある材料でも、その特性を深く追求することにより、特異な性質を見出したり、有効に利用しうる可能性がまだ充分残っていることが確認されたことであった。

本稿は特定研究「機能性伝導酸化物皮膜に関する研究」の一端を紹介したものである。この研究に御協力賜りました諸氏に対し厚く謝意を表します。

留学生活の半ばを終えて

外国人留学生（教育学部） 渡辺ジャネッテ（ブラジル）



私は県費留学生としてブラジルから参りました、日系の三世です。今年一年、日本で勉強することができて、大変嬉しく思います。ブラジルよりも進んでいる祖父母の国を見ることができるのは、夢にも思わなかったことでした。

今でも成田空港に着いた時のことが思い出されます。日本にきたことがまだ信じられない感じでした。しかし私の周りを見ると、日本人の顔がびっくりするほどたくさんありました。それでも知ってる人は一人もいません。その時「もう日本なんだ。私は何も分からない。どうしたら良いのだろう。誰かに聞いてみようか。」と考えましたが、本当は質問する内容さえも分からないくらいでした。ただ、富山県関係の方が同行してくださったので、少し安心できました。それでも東京から富山までの間はまだまだとても不安でした。その頃、日本は初春で景色がきれいだったと思いますが、その時の私には全然何も見えませんでした。ひどい不安に包まれていた私は、何とか自分自身を取り戻そうと必死でした。今まで生きてきたことの自信が萎えてしまったようでした。

富山駅に着いた時、親戚や友達の皆様が温かく迎えてくださいました。その時のありがたい気持ちは絶対に忘れることができません。大変嬉しくて、目に涙が溢れてきました。

しばらくの間、時差のせいで夜は眠れませんでした。そこでいろいろな体験や数多くのできごとを思い出していました。そして、目的意識をもって心強く暮そう、自分自身を伸ばすように頑張ろうと心に決めました。この決心ができてからは、日本というものを落ち着いて見るができるようになりました。

春は大変素晴らしい景色でした。さくらの花が街中に、夢のように咲いていました。そして、この景色に

相応しい人々とたくさん知り会えました。皆様から大変ご親切にいただき、人間関係がさくらの花のように咲き始めた感じでした。とくに一番ありがたかったのは、古瀬光子さんと知り合えたことだと思います。古瀬さんは、私の拙い、でも心の底からの表現を一生懸命に理解してくださいました。今、彼女は“ My Japanese mother ”という存在になっています。

夏になって、とてもきれいな日本海と太平洋を眺めることができました。また、各国からの留学生とお会いできる国際交流の催しを通じて、人間関係が広がり、日本社会の仕組みや風俗・習慣が少し理解できるようになりました。

日本に来てから半年。季節は今、秋になりました。木の葉が素晴らしい色に変わっていく景色の中におります。私には生まれて初めてのことで、びっくりしました。この季節のように、人々の心も紅葉漂わす風に吹かれながら広がっています。日本人は心の中にも季節・自然が流れているように感じられました。

また、秋は故郷が恋しくなる季節で、両親や祖父母・兄弟のことを思い出す時間が多くなります。日本でのこの一日一日を楽しく生きていたなら、この秋風の芳香が家族の心まで伝えてくれるのではないかと、そう祈りながら日常生活を続けています。

大学の勉強については、初めの目標以上に研究ができたと思っています。これは教育学部の皆様、特に室橋先生のご厚意によるものです。大変良い勉強ができ、日本の文化や日常的な考え方を学ぶことができました。

日本の皆さんとの交流の輪がだんだん広がり、友達もずいぶんと増えました。日本の山川、景色、文化と価値観を学ぶこうした機会を私が得ることができたのは、両親の好意によるもので、心から感謝しています。これからも人間関係がさらに広がり深まるよう、また私の周りにいる人々が幸せに暮らしていけるよう、心から願っています。

留 学 雑 感

外国人留学生（教育学部） 清水マルシア小百合（ブラジル）



祖父母および父の故郷である日本については、幼い頃から数多く話を聞かせてもらっていました。もちろん世界中で有名な現代の日本ではなく、戦前の日本、ふるさとを思い出しての懐かしい日本についてですが、物語を聞かせてもらうたびに天国に近い島を夢

見ていた自分が思い出されます。また、日系人として長年、日本語教育を受け、いろいろな形で、日本の文化に触れながら私は育ってきました

このように“日本風”の環境の中で、ものの見方や考え方が養われていくうちに、知らず知らず日本に対する関心は深まり、母国（ブラジル）へ捧げる愛とともに、それは私の中で大きくなっていきました。そしてこの思いは、祖先の国をもっと詳しく知りたいという願いにやがて高まっていきました。

日本に来たのは、単なる好奇心からではなく、祖先ひいては自分の存在を確かめるためでもあります。日本人の血をひいている私にとっては、この祖先の地・東洋の島国での生活は、ブラジルでの生活とはかなり違って興味深いものです。しかも一人の人間として自分を磨く好機でもあります。そして皆さんといっしょに日本文化の中で生き、自分を捉え直していくうちに、もう一つの自分像というか、自分でも気づかなかった日本人的な側面が発見されるようになりました。

前にも書いた通り、日本のことを以前から少しは知っていたためなのか、文化的な衝撃はあまり受けませんでした。食べる物もほとんど変わりませんし、習慣もあれこれと祖父母から伝え聞いていた通りで、多少近代化してきていても基本的には大差ありませんでしたから、わりとスムーズに新生活に入れました。もちろん、親許から離れて暮し始めたひとは不安な感じでいっぱいでしたが、それでも周囲に暖かく支えてもらったおかげで、ひどいホームシックにもかからず、元気に毎日をおくることができました。

県費留学生として一年間、富山大学教育学部でお世話になります。この間に、世界から注目される日本の教育や文化を勉強しできるだけ身につけて、今まで持っていた幼児教育に関する自分の考えを見直す機会にしたいと思っています。大学側からも感謝しきれない程に助けていただいております。演習・講義、研究や実習を通じて、日本の幼児教育の一端を学ばせていただいております。また、教育研究や祖先の勉強に留まらず、留学体験とそれを通しての貴重な社会勉強をしています。

ところで、日本人は外国人に対してあまり受容的ではないとよく批判されますが、これは日本人だけの問題なのでしょうか。交流というものはもともと両者が理解し合ってできることです。そう固く信じて初めて可能なことです。ましてお互いが違った文化の中で生まれ育ったような場合には、より長期間の交際が必要で、それに基づいて関係が築き上げられていくでしょう。私はそう教えていただきました。

一口に国際交流と言われますが、その実現は非常に難しいことです。互いの違いを認め理解し合ったのち、もう一度自分の文化を見直し、相手の考えをプラスの方向で導き入れることが重要です。それは、無条件に自分の文化を変えてしまうことではありません。ものごとをより総合的に捉え、異なった視点から眺める態度を養うことなのでしょう。

7ヶ月前の私に比べると、どことなく成長できているように思います。こうした進歩も、このような心強い人間関係に支えられているおかげです。一見しただけでは日本人とあまり変わらないと言われる私ですが、心は60%ぐらいブラジル人なのだ、ということを確認できました。しかし、この半ば以上を占めるブラジル性に加えて、この留学を通して発見できた、キラリとかがやく40%の日本性を活かしていきたいと思えます。その上に立って、教育あるいはこれからの私の人生を見つめ歩むよう、努力していきたいと願っています。

学 部 だ よ り

教育学部

平成元年度教育実習の指導を顧みて

附属小学校実習部長 水上 義行

平成元年度の教育実習は、9月6日に始まり10月19日に修了した。(前期4年生9月6日～9月26日、後期3年生9月29日～10月19日)この間、68名の4年生と70名の3年生が実習の体験を行ったのである。

本年度の公開授業には、例年に比べて多くの参観者を得ました。特に、学部の先生方には何度も足をお運び戴きました。厚く御礼申し上げます。

本年度は本校の体育館が改築中ということで、体育の授業を附属養護学校、附属中学校の体育館で一部実施させて戴くという状況だったため、実習生の諸君には何かと不都合な生活を強いることになった。

また、例年のことながら、本校が2学級という中規模学校であるため、各クラスに5名～7名の教育実習生を配属しなければならず、各教官には夜おそくまでご指導戴くことになった。下校時刻を6時をお願いしていたが、実際には平均9時の下校となってしまった。この時期の6週間は、教官にとっては過酷な勤務態勢の中で生活を強いることになった。深く感謝を申し上げたい。いつの日か、学級増の日を現実のものとして考えていかなければならないことを今年も痛感した。

本校で実習を終えた138名の学生諸君の姿を振り返ると、幾つかの課題が指摘できる。紙面の字数もあるため三点あげてみる。

その一つは、基本的な生活習慣の欠如ということである。「挨拶が出来ない」「時間が守れない」「自分の責任が最後まで果たせない」「チームワークが取れない」など、どの教官からも愚痴が出てくる始末である。特に3年生に多くの問題を抱えていたように思う。このような姿を防がなければいけない。

二つ目には、授業実践への構えである。

本校で行っている公開授業や観察授業さえも見えない学生がいるのには驚きである。授業を基本に置いた事前の学習が不足している。授業の進め方や教材の

作りかたなどへの関心を、より強くもってもらわなければいけない。実習生の前に座っている子供はモルモットではない。かけがえのない子供たちの存在を意識した姿が欲しい。

三つ目は、教えてもらおうという受け身の構えである。

実習では自分の実践を教官の手助けで試してみようという姿が欲しい。すべて教官の支持がなければ動けないから、授業にならないのである。ほとぼしる情熱が感じられないのが残念である。教育学部を目指した原点に立ち返り、自分の生活に授業を位置付けてもらいたいものである

問題点ばかりを指摘してきたが、すべての実習にあてはまるわけではない。中には、素晴らしい実習生に巡りあうこともできた。

遠く県外のユニークな実践校へも足をのばし、実践力のある教師の授業を積極的に観察したり、著書を読んだりして、授業を見る目、授業を創る目を養っている。このような実習生は、授業の進めかたはもちろん、子供への接したかも抜きん出ている。すぐにでも現場に立たせてみたい実習生もいた。

このように、どの教官が見ても関心することの多い実習生がいたのも事実である。

さて、平成元年度の教育実習は終わった。

3年生、4年生ともに3週間の実習を終えて、子供たちとの別れを惜しんだが、子供は声をあげて泣きじゃくり、実習生諸君も泣いた。その胸のうちに去来したものはなんであっただろうか。こどもの純真な姿に接して、教師への道をより確かなものとした学生が、一人でも多く出てくれることに期待をしたい。そして、今後は互いに実践を持ち寄って子供のことを語りたいたいものである。

附属の全教官は、その日が実現することを夢に見ているはずである。

教育実習を終えて

教育学部4年 加藤政昭

教育実習が終わりました。4年次は6週間という長期間にわたるものでした。この期間を私は附属養護校高等部33人の子供達の「先生」として過ごしました。自分の懂れていた「先生」という立場。数週間ではありましたが、その夢にまでみた「先生」として実際に教壇に立ち、充実した日々を体験することができたのです。

去年は、堀川小学校で実習をさせていただきました。一番最初にズラリと教室に並んだ子供達を前にした時は、喜びと同時に、自分に与えられた責任の重さを感じました。教育実習生といっても子供達にとっては、大ベテランの先生方と同様、彼らを指導する「先生」なのですから。正直なところ、訳もわからず無我夢中のまま、3年次の実習は終わってしまったような気がします。

そんな3年次の実習でしたが、その実習の体験のおかげで、今年の実習には、かなり心に余裕をもって様々な課題に取り組むことができました。養護学校と小学校というように、実習を行った校種は異なりましたが、授業やその他の点で基本的なものは全く同じだという印象を受けました。実際に授業をするにあたって、昨年堀川小学校で身につけたものが生きてくるといえることがかなりありました。理解力の十分でない知恵遅れの子供達を相手にするとき、発問、指示等

はシンプルでわかりやすいものにしないといけません。それだけに、知恵遅れの子供達を相手にするときこそ、授業技術など教師の力量が問われるのではとも感じました。授業の基礎の基礎とも言える理念が、知恵遅れの子供達の授業の中にはあるような気がしました。

今年の実習では、教材研究などでどうして良いかわからなくなったとき、昔受けた講義のテキストやノートなどを読み返してみるがありました。教育実習とは、普段の講義の中で受けた知識を生かすものであると、あらためて感じました。実に当り前のことですが、これまで不勉強であった私にとっては、教育実習に熱中すればするほどいい加減に講義を受けてきたことが悔やまれました。

教育実習が終わり、私の手元には、厚い実習録が残りました。実習中の私の思い、私なりに取り組んでみた授業分析や教材研究のことなど、とにかく毎日ひたすら書き続けてきたものです。この中には、夢中で実習に取り組んでいたときの元気な私が写されています。この実習録を読めば、子供達と過ごした楽しい思い出が心のたかぶりとともによみがえってきます。この実習録を私の心の友として、教員となっても大切にしていきたいと思います。

平成元年度教育学部秋季学生合宿研修を終えて

実行委員長 長井宗路

立山連峰もすっかり雪を頂いて、季節は冬の到来を告げています。思えば、あの立山の麓にて、私たち教育学部生は、9月4日から3日間の合宿研修を行ったのでした。

この教育学部合宿研修は、教育内容の充実と学部生相互の親睦を深めるために毎年行われているものです。今回の合宿では、(1)共同生活による相互啓発と連帯感の育成を図ると共に、集団的な教育諸活動の指導力を身につけること、(2)自然愛護を通して豊かな人間性の形成に寄与し、優れた資質の教員の要請を図ることを目的に行いました。

6月に私たち実行委員が選出されてから、私たちは夏休みも半ば返上して、企画と運営について念入りに話し合いました。8月には実行委員の事前研修を呉羽少年自然の家にて行い、宿泊学習・野外生活の意義と指導法について職員の方々から指導を頂きました。又、国立立山少年自然の家を実際に何度か訪ねて、職員の方々との企画・運営について打合せをしました。

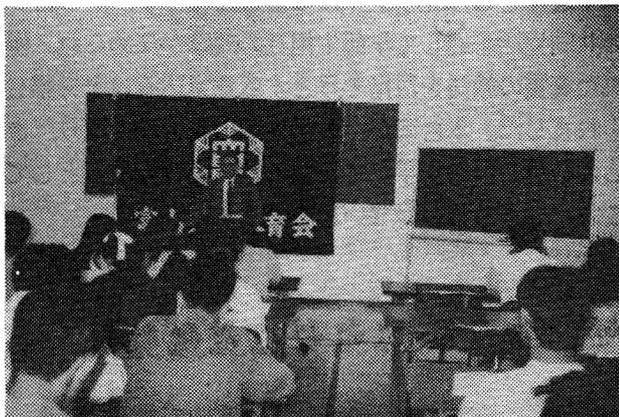
実際の合宿では、計画当初から天候が気になっていたものの、全日程を通してテント生活で行いました。天候の不順もありましたが、何とか雨をしのぐことができました。ディスカッションでは、企画委員が作成

意義あるものであったかどうかは今すぐにはわかりません。今回の研修会は、参加者の皆さんに「リーダー」や「クラブ運営」といったことについて考える1つの機会であったと思います。今後は、この機会をきっかけとして、更に考え、実践していただきたいと思います。また、研修会で得たものを、クラブ員に伝え、明日の体育会クラブの発展と前進のために生

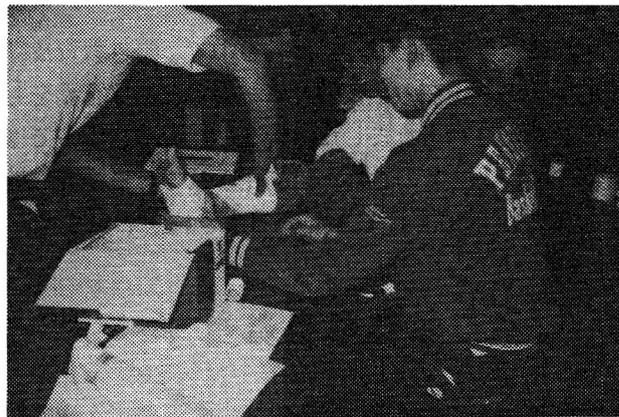
かして行ってほしいと思います。そして、是非とも、今回の研修会が意義のあるものであったといえるようにして下さい。

最後になりましたが、この研修会を行うにあたって、体育教官、学生部の方々に大変御苦勞をお掛けし、多大な御協力を頂いたことを深く感謝いたします。

ありがとうございました。



熱心に講義を聞く受講生



テーピング実習に取り組むリーダー

交通事故防止について

交通死亡事故の激増から第2次交通戦争とまで言われる昨今、本学学生の学内・学外における交通事故も後を絶たず、4月から10月までの間だけで、既に14件もの交通事故が報告されています。

これらの交通事故のほとんどは、交通ルールを厳守していれば防げたと思われます。

交通安全のために

1. スピードは控え目に
2. 交差点では必ず安全確認を
3. シートベルト・ヘルメットの正しい着用を
4. 飲酒運転は絶対しない
5. 歩行者・自転車をみたらまず減速を
6. 歩ける場所へは歩いて行こう

交通事故は被害者も悲惨ですが、これに劣らず加害者も悲惨です。交通事故の当事者にならないよう交通安全に心がけてください。

また、富山県内の交通死亡事故は昨年に比べて30%を越える増加（増加率全国ワースト6位）となっており、万全の注意を払っての自動車・オートバイの運転を呼びかけます。

ところで、大学構内での移動に、まだ自動車・オートバイを利用している学生が見られます。授業・課外活動・食事のための移動の際は、自分の足を利用してください。

本学学生の関わった最近3年間の交通事故の内容は別表のとおりです。

本学学生の関わった過去3年間の事故の内容調べ

事故の内容	昭和62年度		昭和63年度		平成元年度		計
	学内	学外	学内	学外	学内	学外	
自動車どうし	5件	2件	4件	3件	1件	件	15件
自動車と自転車	1	1	2	3	1		8
自動車と歩行者		3		3		2	8
自動車自損	3	1	1	2		1	8
自動車とオートバイ	5	4	2	3	2	6	22
オートバイと歩行者	2					1	3
計	16	11	9	14	4	10	64

(注) 平成元年度は10月31日までの件数

冬期の路上又は駐車場での自動車等の放置自粛について (お願い)

今年も降雪期を迎えましたが、構内道路、駐車場の除雪を例年どおり実施する予定です。

については、路上又は駐車場での自動車等の放置は除雪作業の妨げとなり、他の通行の支障となるばかりでなく、放置自動車等への損傷の原因ともなりかねませんので、是非ともこのような路上又は駐車場での放置を慎んで、効率的に除雪作業ができるよう一層のご協力をお願いします。特に路上は、降雪のため危険な状況となり、さらに、除雪のため道路が狭くなり人の歩

行や自動車等の通行の妨げとなりますので除雪後も絶対駐車しないようにお願いします。

なお、実験研究などで止むを得ず夜間から早朝に亘り駐車場に駐車する必要がある場合は、あらかじめ所属部局会計係等へ車番、駐車場所、所有者の氏名、所在及び内線電話番号などをご連絡の上その指示に従ってください。

全学の教職員、学生の皆さんの御協力をお願いします。

冬山登山の事故防止について

冬山登山における遭難事故が依然としてあとをたたず、例年、年末年始には多くの遭難事故が発生しています。

冬山登山は、たとえ知識や経験、技術に優れていても、天候の急変が直接遭難事故に結びつくことを肝に銘じる必要があります。日ごろから、体力の増強に努め、十分な訓練を積んだ人が、冬山の特性をよく理解

し、豊富な経験と優れた技術、指導力を持つリーダーのもとで、慎重かつ適正な計画と万全の準備を整えて登りましょう。

知識や経験、技術の未熟な者はこの時期の登山は慎みましょう。

なお、登山の際は必ず登山計画書を作成し関係者へ提出して下さい。

留学生が和紙漉きに挑戦

本学に在学する外国人留学生の修学の一環として、例年行っている見学旅行を今年は、去る11月1日（水）留学生22名参加のもと、八尾町にある桂樹舎で伝統ある越中和紙の紙漉きに挑戦しました。

桂樹舎では、従業員の方々の手ほどきを受けながら、

思い思いの構図で和紙を漉き、それぞれの出来具合に一喜一憂し、楽しい時間を過ごしました。

その後に、民俗工芸館を見学し、帰校しましたが、各留学生には短い時間であったが、今回の旅行を通して、親睦をより一層深めたようです。



紙を漉く留学生



出来上り笑えむ留学生

平成元年度後期授業料免除について

平成元年度後期授業料の免除については、さきに関催された授業料等減免選考委員会の選考を経て、出願者655名（学部609名、大学院46名）のうち、450名（学部423名、大学院27名）が全額免除、93名（学部82名、大学院11名）が半額免除を許可され、33名が不許可となり、残る79名（特別な事情2名、私費外

国人12名、超過免除65名）は、文部省へ申請ることになった。

授業料免除及び奨学金を希望する者で不明な点があれば厚生課奨学係又は各学部の学務係（経済学部、教養部は学生係）において相談してください。

なお、前期授業料免除実施状況は下表とおりです。

区 分	出 願 者	許 可 者	不 許 可 者
学 部	575名	511名 (122)	24名
大 学 院	52	48 (15)	4
計	627	599 (137)	28

平成元年度後学期専門課程移行者調

(元. 10. 1付)

学部	入学年度 学 科		専門教育課程移行者数					移行不許 可者数	移行対象 者 数
			59	60	61	62	63		
人 文	人 文 学 科				1		86	14	101
	語 学 文 学 科					1	91	5	97
	計				1	1	177	19	198
教 育	小学校教員養成課程						120	4	124
	中学校教員養成課程						67	6	73
	養護学校教員養成課程						18	0	18
	幼稚園教員養成課程						27	0	27
	情報教育課程						39	1	40
	計						271	11	282
經 済	昼 間 主	經 济 学 科			1	7	116	37	161
		經 営 学 科				2	114	18	134
		經 営 法 学 科			3	2	88	22	115
		計			4	11	318	77	410
	夜 間 主	經 济 学 科						4	4
		經 営 学 科				2		1	3
		經 営 法 学 科						3	3
		計				2		8	10
理	数 学 学 科			2	1	1	36	10	50
	物 理 学 科					3	33	14	50
	化 学 学 科					1	36	8	45
	生 物 学 科			1	3	1	28	9	42
	地 球 科 学 科				1	2	31	7	41
	計			3	5	8	164	48	228
工	電 気 工 学 科		1			1	51	9	62
	工 業 化 学 科		1	1		3	36	21	62
	金 属 工 学 科					3	34	15	52
	機 械 工 学 科				1	4	43	16	64
	生 産 機 械 工 学 科				1	1	42	6	50
	化 学 工 学 科					1	35	21	57
	電 子 工 学 科					4	33	21	58
計		2	1	2	17	274	109	405	
合 計		2	4	12	39	1,204	272	1,533	

キャンパスの草本誌（1）

キカラスウリ (Trichosanthes Kirilowii Maxim. var. japonica) ウリ科 － 根茎から天花粉 －

キカラスウリはつる性の多年草で、他の植物にまといついで茂る。根は地中深く入り、太いものは人の腕ほどもあり、この根のでん粉からあせもに用いる天花粉（天瓜粉）をつくる。寒中に採集したものの滑らかで最高とされている。

雌雄異株で花期は夏。花は白く花冠裂片はしゃもじ型で、先が糸状に細かく裂ける。ナデシコの花のようである。果実はラグビーのボール型で長さ8cm内外。初めは淡緑色で青白色の縞模様が縦にある。熟すと黄色くなる。中に扁平な種子が入っている。

朱色に熟するのがカラスウリ (*T. cucumeroides*)。キカラスウリよりも小さく長さ5cm程度。球状のものもある。これはピンポン玉ほどの大きさである。果実は、普通、葉のわきに1個なるが、まれに2-3個のこともある。種子はカマキリの頭に似ている。これを結び文に見立てて玉章たまずきの古名がある。花冠は深い星状に開き、先がレース状に細かく乱れる。キカラスウリよりもはるかに繊細。いずれも夕方に開花するが、カラスウリは早朝しぼんでしまう。夜でないと見られない。根茎のでん粉は天花粉に、また果肉は粘りがあり乾燥

しにくいので、ひびやあかぎれにつける。

キカラスウリは北海道から九州、奄美大島に、キカラスウリは本州から九州、台湾、中国などに分布する。

本学キャンパスでは、キカラスウリは本部横とバス停前の生け垣にある。だが取り除かれて果実は楽しめない。また、キカラスウリは自然観察実習センターの林縁にあり、晩秋の陽差しとよく似合う。

教育学部教授 長井真隆



キカラスウリ（左）とカラスウリ（右）

学園ニュース編集委員

学生部長	瀧澤 弘	理学部	松本 賢一
人文学部	河村 貞枝	〃	広岡 公夫
〃	山口 幸祐	工学部	島崎 長一郎
教育学部	呉 羽 長	〃	杉本 益規
〃	原田 嘉昭	教養部	高安 和子
経済学部	山崎 清	〃	山本 孝一
〃	相澤 吉晴		